第34回日本骨折治療学会印象記

手稲前田整形外科病院　畑　中　　渉

2008年６月27日28日の両日，聖マリア病院の吉田健治先生が会長で，福岡国際会議場にて第34回日本骨折治療学会が開催されました．梅雨時の九州での開催でしたが，28日以外は天候に恵まれ，会は盛況のうちに終了しました．日本骨折治療学会には2000年の東京で開かれた第26回に参加して以来，都合６回目の参加になりますが，今回その印象記について書くよう命じられましたので，印象を綴ります．

骨折治療学は整形外科の根幹をなし，整形外科医であれば骨折患者さんに遭遇する機会は極めて多く，骨折治療学の最低限の知識の習得が必要ですが，かつては徒弟制度的な修行による知識・技術の習得が行われてきたといえます．学問的に体系付けられた治療（AO 法）が行われるようになると同時に，社会情勢も変化して，グローバルスタンダードに則った質の高い医療を提供することがわれわれに求められており，日常の診療・研究の成果を発表・討論する場がこの骨折治療学会になっていると思います．

演題応募数434題が採用385題（うち82題はポスター発表）に絞られていましたが，会場が６会場（ポスター会場含む）に分かれているため，どの分野を聞くかが悩みの種になり，上肢と今回の学会テーマである「成長期の骨折」を主体に聞いてきました．

小児の骨折については，今までは多くが保存的治療の適応であり，適切に治療されれば予後はきわめて良好なものなのですが，最近の社会・家庭環境，さらに医療情勢の変化で，早期の離床・早期の退院・早期の復学がなされるようになってきており，診断・治療の原則は同じでも，その方法が変化しつつある状況の中，「成長期の骨折」のシンポジウムは有意義なものでした．「成長軟骨板損傷の病態と修復過程」・「骨端軟骨板の生体力学的特性」の基礎的講演で骨端線損傷の知識のまとめをすることが出来，また「小児上腕骨顆上骨折：整復台を用いる経皮ピンニングの実際」・「小児橈骨遠位端骨折の検討」の臨床的講演では，現在主流となりつつある治療法の再確認，「小児肘外傷後の変形治癒」・「小児大腿骨骨折の長期予後」・「小児における脛骨骨折後遺症の治療」の講演では，予後も見据えた上での初期治療の重要性，リカバリーの問題点を再確認でき，有意義なテーマであったと思います．小児骨折＝成長期の骨折に対して，決して手術適応の甘い拡大はせず，意義のある手術適応の拡大を考えていこうと思った次第です．

パネルディスカッションのテーマ「Locking Plate」は，技術法である MIPO とともに，利点・工夫・問題点が討論されました．確かに，conventional plate と比較して，その固定原理（骨片圧迫固定か架橋固定か），プレートの長さやスクリューの数や位置の問題が整理されずに（理解不足？）施行されている例を時々見かけることから，単なる有効なプレートとしての認識ではなく，正しい知識の啓蒙が必要と思われます．

ヌーンタイムレクチャーの「吸収性骨接合材料の臨床応用と展望」では，販売当時鳴り物入り（？）で紹介されたポリ - L - 乳酸単独の製品はすでに使用されなくなってきており，現在の主流はポリ - L - 乳酸とハイドロキシアパタイトとの重合体で，中空型スクリューも開発され使用が開始されており，さらに，プレート固定につながる製品の開発（多孔性の吸収性シー

ト）がトピックとして紹介されました．“溶け出しつつ骨と接合すること”を目的に開発されており，供覧された症例の経過もなかなかでした．今後使用が増えることが予想されます．

個人的な感想になりますが，骨折治療の多くを占める保存療法の演題は骨折治療学会といってもいつも少ないです．手術治療は治療計画を間違えなければ，ほとんどは良好な成績との報告になりますが，保存療法が本当に有効に実施されているのかを検証するための報告がもっとあっていいと思っています．

学会翌日は，第８回エンダー法セミナーにも参加して，エンダー法を少しだけ学んできました．材料費が安く，正しい手技を習得すれば今後もまだまだ使い勝手のある方法ですので，単一の手技だけを修練するのではなく，手技を複数持っていることが強みにもなりますので，皆さんも参加いかがでしょうか？

北海道からの参加者は，いつも多いとはいえない状況ですが，今回も見慣れた顔ぶれに会うことが出来，夜も美味しい海産物，地鶏，お酒を堪能することが出来ました．

次回は，聖マリアンナ医科大学の別府諸兄先生が会長で，2009年７月３日４日に横浜にて開催されます．エンダー法セミナーも学会に合わせて開催されるそうです．次回の骨折治療学会には，ぜひ北海道から多くの先生の参加・発表があることを期待しています．